

持続可能な社会をつくる元気ネット主催
「電気のごみ・地層処分最前線を学ぶたび」出版記念会と新春交流
のつどいにおける挨拶（予定稿）

2011 年 1 月 12 日

近藤駿介

皆さん、あけましておめでとうございます。崎田さん、鬼沢さん、中岡さん、植木さん、皆様の共著になる「電気のごみ・地層処分最前線を学ぶたび」と題するご本の出版、誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。そしてこの本に解説を寄稿された、私のかつての同僚である松田さんにも心からお祝いを申し上げます。

さて、原子力委員会高レベル放射性廃棄物処分懇談会は、平成10年に、この廃棄物の処分を進めていくうえで必要なことは、その安全性が確保され、透明性ある制度が作られ、責任体制が明らかにされ、そのことを含む処分事業への取り組みに対する国民および地域住民の理解を得ることであるとしたうえで、そのためには、国民各層の間でこの問題についての議論が行われ、国民一人一人が自らの身に迫った問題であるという意識を持つことが望まれるとしました。そして、国、電気事業者、実施主体などの関係機関は、こうしたことが国民の各層において議論が行われるよう努める必要があるとしました。

以来、原子力委員会は、関係の皆様、このための取り組み、すなわち、この処分場の開設が電気の未来に重要であり、それが安全にできる仕組みがあること、そして、これの開設が全国の電気の消費者に利益をもたらすので、利益の衡平の観点からこれを受け入れてくださる地域の持続的発展を電気の消費者のみなさんが応援するということを国民に広くご理解いただく取り組みを継続的に推進することをお願いしてきました。

この取り組みのエッセンスは、国民にとって役立つ廃棄物処分施設を受け入れる地域と処分事業を進める組織、そして、国民がウィナーウインの関係を成立させることです。そして、そこに至りつくためには、これらの間に信頼関係を成立させることが前提条件になります。でも、原子力関係者は、国にしろ、事業者にしる、発電所立地地域の人々という国民の一部と対話はできるのですが、このために必要となる国民という広がりを持った存在と信頼関係を築くのはどうしてよいかわからないというところから出発したように思います。

しばしばいわれることですが、信頼されるためには、信頼されることを信頼することが大切です。この点で、崎田さんをはじめとする「持続可能な社会をつくる元気ネット」の皆さんは、この問題を地域環境活動の重要テーマに選んで経済産業省の公募事業に応募し、市民の皆様と一緒にこの問題を考える「地域ワークショップ」の取り組みを進められ、この信頼のネットワークを実践を通じて建設していかれました。

さらに、皆さんは、そうした取り組みのご経験を踏まえたうえで、欧州の地層処分の取り組みの最前線に乗り込み、何が大切かを学び取ってこられ、この本を出版されました。この本は欧州のことを書いているのですが、同時に皆さんのこの取り組みの在り方に対する思いが反射しているように思いました。なかでも中立機関を設立するべしとのご提言は重要な提案と考えさせられましたし、同時に、うかうかしていると、私たちでこの機関を設立運営しますと押しかけてこられるのでは、と思った次第です。

ご参集の皆様におかれましては、著者のファンとして、引き続き著者を応援されることはもちろんですが、この高レベル放射性廃棄物の処分の取り組みに対しても、皆様の故郷において、将来世代のための投資として、また、我が国社会における新しい価値を創造する

取り組みとして挑戦されるように働きかけていただくことも含めて、力強く応援し、実現に向けてご助力を賜りたく、このことをお願いして、お祝いの言葉といたします。本日はおめでとうございます。